

### 第34期小田原市図書館協議会第3回協議会 会議録

日 時：令和3年5月21日（金） 午後2時00分から午後4時15分まで

場 所：小田原市立中央図書館2階 研修室

#### 1 任命式

飯村委員

#### 2 あいさつ

文化部・鈴木部長

#### 3 報告事項

##### （1）令和2年度小田原駅東口図書館事業報告概要及び評価について【資料1】

○事務局説明（資料に基づき遠藤副館長、青柳統括より説明）

○質疑応答

野口委員長：利用者アンケートの自由記述で、これだけの御意見を寄せられるということは、利用者が図書館に関心を持って利用されていることがよく分かる。内容を見ると、駐車場の話等、図書館に寄せられても困る御意見も一部含まれていたが、御意見をいただくことは今後の図書館の運営を考えていく中で非常にありがたいことだと思う。

武田委員：蔵書統計のところに寄贈とあるが、どのようなルートでの寄贈なのか。

青柳統括：基本的には利用者の皆様からカウンターに直接寄贈の申し出をいただいております、受入可能な図書については受入を行っている。

北河委員：アンケートに、自動貸出機は返却日が出ないから不便とあるが、本当に不便だと思う自分自身も利用しているが、返却日を忘れてしまうことがあるので、返却日が分かる紙等があれば助かる。

青柳統括：同様の御意見を多数いただいております、現在は自動貸出機から返却期限日が記載されたレシートを発行するようにしています。

野村副館長：東口図書館で先行してレシート発行を開始したが、効果が大きいこともあり、検討した結果、5月から中央図書館でもレシートを発行している。

飯村委員：アンケートで、寄贈の段階で活用するか否かの回答をいただきたいとあるが、活用する基準はあるのか。

青柳統括：寄贈の基準に関しては、ホームページ等で示しているが、あまりにも古いもの、汚れているもの、既に所蔵しているもの等の受入はしていない。受入をするか否かの連絡は行っていないため、カウンターにお持ちいただいた際に、受け入れられない場合は

リサイクルコーナーに回す等、取扱いについては図書館に一任いただく旨を説明している。

大塚副委員長：アンケートで、学生が椅子を長い時間占領しているとか、お子さんや年配の方が大きな声を出しているという御意見があったが、図書館ではどのような対応をしているのか。

青柳統括：閲覧席については、以前から同様の御意見をいただいております、現在は、コロナ対策を含めて2時間の申込制にしている。今は学生がテストを控えている時期なので多くなっているが、少し前までは学生だけでなく、一般の方も御利用いただいていた。お子さんや年配の方の大きな声については、他の利用者に迷惑がかかると判断した場合は注意している。ただ、お子さんについては、おはなし広場もあるので、多少声が出てしまうのはやむを得ないと考えている。

倉澤委員：御意見の中では、期待感があって、環境も良く、これからの図書館であると楽しみにされている方が多いかと思うが、その中で、改善する点、気を付ける点についても御意見をいただいていると思う。今回はアンケート結果を羅列している状態だが、もう少し整理してもらえればと思う。また、課題に対してどのように対応・改善していくかを示していただくと、次につながっていくと思う。

青柳統括：今回、アンケートの結果については、番号を付け、若い順に並べているため、内容がバラバラになってしまったので、来年度にお見せする時は、内容ごとにまとめて、対応策や改善策を表記したいと考えている。

野村委員：レファレンス件数について 965 件とあったが、中央図書館の件数と比較等を行っているのか。

野村副館長：令和2年度の数値になるが、中央図書館で 3,933 件となっている。なお、地域資料関係については、地域資料室を閉じていたので含まれていない。

大塚副委員長：自己評価表のボランティア団体との連携であるが、ボランティア団体すずの会とおはなし会の協議を行っているところがあるが、小田原市には他の団体がいくつかあるので、1つの団体に限らず、複数の団体と連携を深めてもらえればと思う。また、蔵書について、これから増やしていくことは理解しているが、書棚がガラガラだと、どうしても蔵書が少ない印象を与えてしまう。学校図書館で行っている面出しや、書店が行っているような本の紹介を作ったりする等の工夫をすれば印象が変わるのではないかと思います、提案させていただいた。

図書館長：読み聞かせ団体について、中央図書館で登録している団体以外で活動している団体を捉えきれていない部分もある。それぞれの団体が特徴を持って活動されていると思うので、幅を広げるためにも情報提供をいただければありがたい。

野口委員長：アンケートを見させてもらったが、利用者の動向や御意見を吸い上げるには有効な

手法だと思う。今後は同じ項目で中央図書館でもアンケートを取り、今回のように報告をいただくようにしてはどうか。可能かどうかを含めて検討いただきたい。

図書館長：中央図書館、東口図書館の2館体制になり、それぞれの図書館の特徴を捉えながらどのように内容を良くしていくかを両館相まって整えていく必要があると感じている。これから中央図書館の利用状況、利用者の考え等をどのような形で集めていくか館内で検討させていただき、図書館協議会でお示しして御意見をいただきたいと考えている。

## （2）利用者からの意見・要望等について【資料2】

○事務局説明(資料に基づき野村副館長より説明)

○質疑応答

野口委員長：コピー機の複写設定を1枚しかできない設定にしてほしいというのは、同じページに関してという意味か。

野村副館長：お見込みのとおりです。以前、同じページで多くの枚数を印刷してしまったというトラブルがあった。

大塚副委員長：個人で所有しているDVDの寄贈は受け付けているのか。

野村副館長：家庭用のDVDは著作権に対応していないため、寄贈をいただいても貸出ができないのでお受けしていない。

## 4 協議事項

子ども読書活動に関するアンケート調査の実施について

○事務局説明（資料に基づき野村副館長より説明）

○質疑応答

馬見塚委員：アンケート調査で、直接担任の先生に提出して下さいとあるが、これは封をしてということになるのか。例えば、読書活動を推進しているような園であれば、保護者が読み聞かせをしていないとは書きにくく考えられるので、封ができればより正確な統計がとれるのではないか。

アンケートの項目について、子どもが読む本について自分の家で購入、図書館等で借りるかのどちらかしか選べないようになっているが、大抵の家庭は購入することもあるのではないかと。また、どれくらい本を読むか、読み聞かせをするかという質問に対し、月に1日以上次の項目で読書はしないとなっているが、年に数回は読書をしている子どももいるかもしれないので、そのあたりを注意書きで入れた方がよいのではないかと。

野村副館長：封については、主に幼稚園・保育園になると思うが、教育委員会・保育園とも相談

し、実態として封をした方がよいのか協議をしたいと考えている。小・中学校については、アンケート用紙をそのまま提出していただこうと考えていたが、それについても確認させていただく。

アンケート項目については、前回の調査ではもっと細かい設問になっていたが、集計に時間がかかることと、報告書で結果を出す際に集計を簡略化しているため、今回はその形でアンケート項目を設定しているが、今回の御指摘について再度検討させていただく。

馬見塚委員：アンケート項目を変えてしまうと大変かと思うので、例えば、読み聞かせをしないという回答の中にかっこ書で年に数回も含むといった注意書があればよいのではないか。

倉澤委員：小・中学生用のアンケートで、小学1年生から中学3年生までが対象となると、まず小学1年生では漢字が読めず、ルビを振ったとしても言葉自体が理解できないと思われる。学級担任が説明をしながら補助せざるを得ないが、それは無理があるのではないか。図書館の本は低学年用、中学年用、高学年用と細かく分かれているのにアンケートは一緒になっているのは子どもにとって厳しいのではないか。

また、各学年で1クラスということだが、複数のクラスがある学年では反映されないクラスが出てしまう。件数を絞ったアンケートで、小田原市の読書の実態として捉えるのはどうなのか。実施する際にも、保護者から何故自分の子どものクラスは実施しないのか等の質問が出る可能性がある。そのあたりの説明もしていただければと思う。内容についても、「童謡」や「北原白秋」等をことばの説明に加えてもらえると学級担任も助かる。

野村副館長：ことばの表現や学年毎の分け方等については再度検討させていただく。

倉澤委員：第2次推進計画の中で、家庭における子ども読書活動の推進で、家読の推進が書かれているが、取り組んでいることについて、どの程度反映されているか今後のアンケートに含めてもよいのではないか。

野村副館長：家読については、重要な柱になっているので、その評価をするためにアンケート項目を増やすことも考えている。それも含めて検討していく。

武田委員：小・中学生用のアンケート項目の質問1でマンガを除くとあるが、マンガと言っても、最近ではビジネス書がマンガで書かれる等、色々なマンガがあるので、マンガだからといって全て除いてよいものなのか。質問8で、読みたい本をどのように手に入れたかという設問があるが、この中に電子書籍を加えてもよいのではないか。小・中学生用のアンケート項目の質問10は、小田原文学館の取組がどの程度浸透しているかを知るためということだが、北原白秋だけではなく、小田原の代表的な文学者を何名か記載し、知っている人に丸を付けるなどして、小・中学生の傾

向を知るようにしたらよいのではと思った。

野村副館長：読書の対象となる本の定義として、図書館ではマンガを含めておらず、収集も行っていない。そのような中、質問5でマンガをどれくらい読むかを加えているが、今までの項目の中で実際の読書傾向で反映されていないものがあると懸念しており、今までの本の定義から漏れているマンガの読書傾向がどの程度あるのか調べるため、今回新たに項目に加えている。マンガの定義については、ことばの説明に加えようと考えている。

図書館長：子どもの読書について考えるにあたり、マンガを外すのは逆に不自然であると考えている。あくまで表現形態の違いであり、内容が意味深いものも多くあると承知している。これから図書館の在り方を考えていく中で、マンガが子どもの中で身近なのか、あるいはマンガではない本との対比ができればしっかり捉えていきたいと考えている。

野口委員長：小・中学生用のアンケート項目に、マンガをどれくらい読むか、電子書籍について加えたことは、新たな動向を把握する上で必要な項目だと思っている。その中で、質問9で電子書籍を図書館で利用したいかということだが、これは学校は含まれないのか。全国的には少数だが学校で導入しているケースも出てきているので、この項目を学校や図書館で利用したいかという聞き方もあるのではないかと考えた。何故かという、平成30年に文部科学省が子どもの電子書籍の利用実態を調査しており、その中で、電子書籍を学校や図書館で利用できるとよいと思うかという聞き方をしている。その結果、45%が利用できると良いと答えているので、小田原市の子どもはどうなのかということに興味がある。

野村副館長：電子書籍について、学校の事情を倉澤委員に伺いたい。

倉澤委員：これからということを考えれば、電子書籍の利用希望に学校を加えるのはよいと思う。

馬見塚委員：子どもたちの生活時間について把握しているのかが気になっている。時代と共に変化していて、色々と忙しい中で、読書をするよう迫及しても空回りしてしまうので、読書に充てられる自由な時間がどのくらいあるのか把握する必要があると感じている。

図書館長：アンケート項目数の関係もあるが、そのあたりを踏まえてアンケート内容を検討していきたい。

野口委員長：市の他の調査でデータを取っていれば、併用して分析をすることも可能ではないか。

図書館長：子ども子育て支援事業計画というものがあるので、その中のアンケート調査の結果を確認していく。

野口委員長：今回のアンケートは、乳幼児用、小・中学生用の形で、本日いただいた意見を踏まえて内容を検討していただくという形でよいと思うが、その次に行うアンケートで可能であれば、保護者に向けてのアンケートも是非とっていただければと思う。保護者が子どもにどう読書の働きかけをしているかではなく、保護者自身の読書の実態が子どもの読書傾向に大きな影響があると様々な研究で分かっている。保護者の読書傾向をデータとして持っておくと、それを踏まえた計画策定が可能になると思うので、次のタイミングで検討いただければと思う。

## 5 その他

新総合計画の策定に係る今後の図書館運営について

○事務局説明（資料に基づき図書館長より説明）

○質疑応答

倉澤委員：学校というところは、街づくりとつながっており、学校の中の教育という部分で、今年度から学習端末（タブレット）が一人1台配られている。そのようなことを考えると、デジタルの街づくりというところで、一人一人がデジタルについて学び、生かしていくことが必要になってくる。そうすると電子書籍についても対応していかなければならないところが出てくるのではないかと。そういったところが生活の質を向上させることにもつながると思う。

野村委員：小学生の子どもが調べ学習をした時にインターネットを使用するが、市からのコンテンツが提供されていないことがある。例えば小田原城について調べても漢字ばかりで小学生が調べられないということがある。報告事項でレファレンスのことを質問させていただいたが、小学生や中学生が調べ学習を出来るコンテンツを用意すると同時に、博物館と連動しながら地域のことを調べられる環境が整っていくと、ICT教育にもつながっていくと思う。

図書館長：図書館にある様々な地域資料をデジタル化し、コンテンツとして提供していくというイメージでよろしいか。

野村委員：デジタルアーカイブを作成しても、小学生は読めないのおそらくあまり意味はないと思われる。地域の歴史についてどういう資料が調べられるか、小学生向けの資料はこういう資料があるといった情報を博物館、図書館のサイトに掲載し、相互利用のような形を取ればいいのか。

図書館長：資料なりコンテンツそのものの入口の部分が強めていくというイメージか。

野村委員：来館して調べる際に、本がたくさん並んでいた方がいいはずなので、そういう意味では図書館を利用してもらうことが重要だと思う。研究者や上の世代の方に対してはデジタルアーカイブも大切だと思うが、子どもに関してはまず入口のところを強

化してもらえればと思う。

飯村委員：学習端末（タブレット）について、学校によっては一人1台のところもあれば、一家族1台のところもある。また、学校によって導入時期に差があるので、そこを統一していただければありがたい。

図書館長：学習端末（タブレット）の導入に関しては学校教育のセクションで行っているの  
で、導入状況を把握しきれていないが、皆様が等しくアクセスできるような環境を整えてほしいというイメージでよろしいか。

飯村委員：そのとおりである。

野口委員長：ICTの話がここまで出ているが、ハードは整ってもソフトをどう提供していくかが重要になってくると思うが、その部分は図書館が大きく貢献出来るところではないかと思っている。

武田委員：小田原市としては、2030年のビジョンがあり、それに向かってのデジタル化に対応したシステム作りがあると思うが、一方で、人が伝えるという面も大切だと感じる。

北河委員：これまでの話に出たような子どもの教育も大切だが、60歳以上の方に対しての教育も大切だと思う。やる事が無く時間を持て余している方に対し、学び直しの場の提供を図書館が担ってくればいいのではないかと思う。

大塚副委員長：小田原市では、世界が憧れるまちを目指しているとのことだが、図書館において、小さなことでもいいので、世界に憧れられるようなことを目指すのもよいのではないか。

馬見塚委員：世界が憧れるまち小田原には世界が憧れる図書館があってほしいと思う。最初に中央図書館のことを知って感動したことは、おはなしの部屋があるというところである。これはなかなかできないことではないかと思っていて、昨年作成した児童文化財についての教科書で、中央図書館のことを紹介させていただいている。これから小田原の図書館の素晴らしさを自慢できるような盛んなものにしていってもらいたい。

今後、小田原市として大きな変革を10年計画でやっていこうとしているが、それを成すのは人なので、人づくりが大事だと感じている。一部の人が分かっているかもしれないが、市民の皆様が方向性を共有していなければならないので、色々ところで生涯学習の場を活用し、新しい時代に向けてどのようにしていくかを学べる場があればよいと思う。

デジタル化をうたっているが、弊害もあるようなので、小田原には豊かな自然があるので、自然に根差した体験を大事にしつつ、高度なICTを活用できる人材を育成してほしいという願いはある。

野口委員長：小田原の図書館は文化の拠点であり、情報の拠点である。ただ、残念ながら利用している方は、市民全体から見ればごく一部の方である。今後は、利用していない方にも利用してもらうような方法を考えていくのも大事なのではないか。その一つの方法として、電子書籍はデジタルアーカイブを活用する。もう一つは、市内にある文化施設や色々な取り組みをしている団体があるので、より一層連携を強化して、図書館に来てもらう手前の段階で、図書館側が外に出ていき、外で図書館のことを知ってもらったり体験してもらう機会を増やしていけるかが重要なポイントだと思う。図書館と一緒に何かやりたいと思っている施設や団体は市内にたくさんあると思う。そのようなところとタッグを組んで、図書館の資料紹介をしたりして、図書館の存在をアピールし、図書館を使ってみたいと思う市民を増やしていくことも重要かと思う。

○事務局説明（小野主査）

- ・ 次回の協議会は 10 月頃開催予定
- ・ 後日、本日の議事録の確認をお願いする。

野口委員長：第 3 回の図書館協議会を終了する。